

浜田小学校 人権教育推進計画

1 本校の人権意識における現状と課題

昨年度末、人権教育をふりかえって子どもや教師の課題となる姿を整理していく中で、低中高学年のそれぞれに次のような言葉がよく聞かれるということが明らかになってきた。低学年では「～してあげる」、中学年では「だって〇〇さんが□□していたから」、高学年では「私は差別なんかしていない」である。「～してあげる」という言葉は、相手に思いやりを持ってかかわる中での言葉のようであるが、実際は相手のできることまでも奪ってしまっていたり、たてのものさしで人間関係を築いてしまっていたりする中で出た言葉であることが多かった。また「だって〇〇さんが□□していたから」と責任の所在を自分ではないだれかに押し付けたり、「私は差別なんかしていない」と自分の差別心と向き合おうとしなかったりする実態がみられた。つまり、困っている相手や問題に対して自分事ではなく、他人事と捉えているということである。こうした子どもの実態を生み出しているのは、私たち教師の普段のかかわりや言動による影響が大きいと考えたい。なぜなら、私たち教師も『自分事』として考えることから出発し、自分を見つめ直していくことが課題となる子どもの姿をクリアするための近道だからである。そこでまず私たちが大切にしたいのは「子ども一人ひとりの家庭背景を知ること」である。

本校の子どもたちは、学力の2極化とともに人とつながる力の弱さが課題となっている。これらの課題の要因としては、家庭背景を中心とした子どもを取り巻く環境の多様化があると考えられる。家庭背景には、「外国にルーツがあること」や「障がいがあること」といった人権課題につながるものもあれば、「経済的なしんどさ」といった社会の構造によって生み出される差別の現実もある。多くの家庭はあたたかいかかわりを基盤として、子どもの成長を学校とともに考え、その取り組みを見守っていくスタンスである。しかし一方で、虐待やネグレクトといった子どもが決して安心を感じることをできないかかわりや、わが子や自分自身を正当化しようと無理な要望を並べ立てる家庭があることも事実である。こうした家庭背景を知るだけでも、子どもの見え方や教師の働きかけは変わってくる。

また、子どもや保護者とのやり取りから、ジェンダーに基づく偏見や多様な性に対する無理解、外国にルーツがあることへのマイナスな見方といったことは、いまだに根強く残されていることがわかる。しかし、こうした不合理を嘆いたところで子どもや保護者の変容には期待できない。そのためまずは、私たち教職員から自分自身の言動を見つめ直し、家庭から発信される差別の現実に関与するために、それを越えていけるだけの実践をしていけるかが求められる。そして、これこそが私たちの「差別をなくす行動（＝自分を好きになること）」となる。私たちは常に、差別に対して「なくす」か「残すか」のどちらかの選択を迫られている。「なくす」の選択肢を選び続けようとすることは、必ず私たちの生き方そのものを豊かにしてくれる。

人権意識の高まりを支えるものとして、「自分を好きになること」がある。先に述べたような実態の中、子どもたちの中には「自分が好きか」ということに課題が生まれていると考える。「自分を大切にできる子は、友だちを大切にできる子」という言葉の通り、「自分が好き」という認識は自分を含めた周囲の人権を大切にすることにもつながる。子どもたちの中には、この「自分が好き」という思いをなかなか持てずいたり、「自分を大切にすること」の意味を取り違えていたりすることが多いと感じる。意味を取り違えている子の多くは、自分の主張を守り通すことに固執し、これが「自分を大切にすること」であると考えてしまっている。例えば「自分のかかわり方次第」ではなく「すべ

て相手（周り）のせい」と捉えたり、「自分のために指摘してくれているから受け止める」ではなく「嫌なことを言ってきたから言い返す」と捉えたり、「しんどいことを聞いてくれてうれしかった」ではなく「言いたくないことを言わされて嫌だった」と捉えたりする姿だ。こうした子どもの姿は、少なからず周りに影響を及ぼしていて、学校全体としての人権意識がなかなか高まらないという現状にもつながっているのではないだろうか。

自分の言動が「差別をなくす」ということに向かっているかどうかを見つめ直し、自分自身を変えようと意識し、行動につなげていくだけで子どもを取り巻く人権文化は一気に変容する。つまりは「だれもが安心していきいきと学ぶことのできる状況」をつくることに直結するのである。人権学習は、差別の不当性について考える学習でもあり、ものごとを自分事として考える生き方の学習でもある。偏見や不合理を跳ね返す生き方を学んだり、自分の中の差別心や人間関係を築くときのものさしを見つめ直したりする取り組みを進めて、一歩ずつ積み重ねていく学習である。お手本のような答えや考えを出す子は多いが、それを実生活にいかしたり、自分の身近な問題であると意識できたりする子はまだ少ない。「6年生で部落問題学習ができる子どもたちの育成」を合言葉に、「自分を好きになること」を柱として系統立てた人権学習を通して、差別をなくしていきたいという願いを持ち、自分事として考えることでだれもが同じように大切にされる社会の実現をめざした取り組みへと続けていかなければならない。

2 めざす姿

○めざす学校の姿

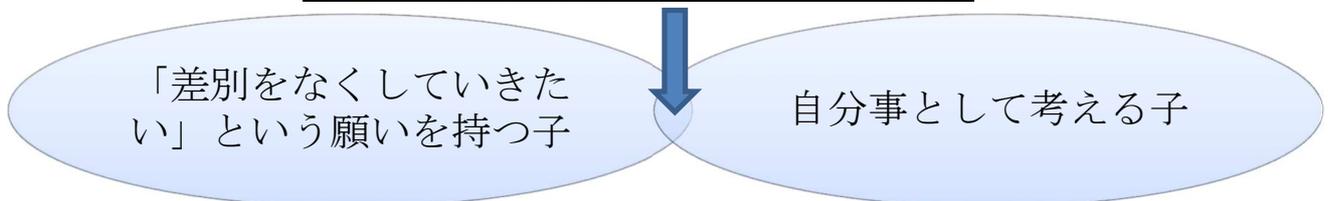
学ぶことが楽しい学校

○めざす子どもの姿（学校教育目標）

考える子・やさしい子・つよい子

- ①一人一人に、自分で考え、判断する力をつける。→考える子
- ②自分と仲間を大切にし、あいさつを通して人とつながり合える子どもを育てる。→やさしい子
- ③仲間とともに差別と向き合い、自分の生き方を見つめる実践力を育てる。→つよい子

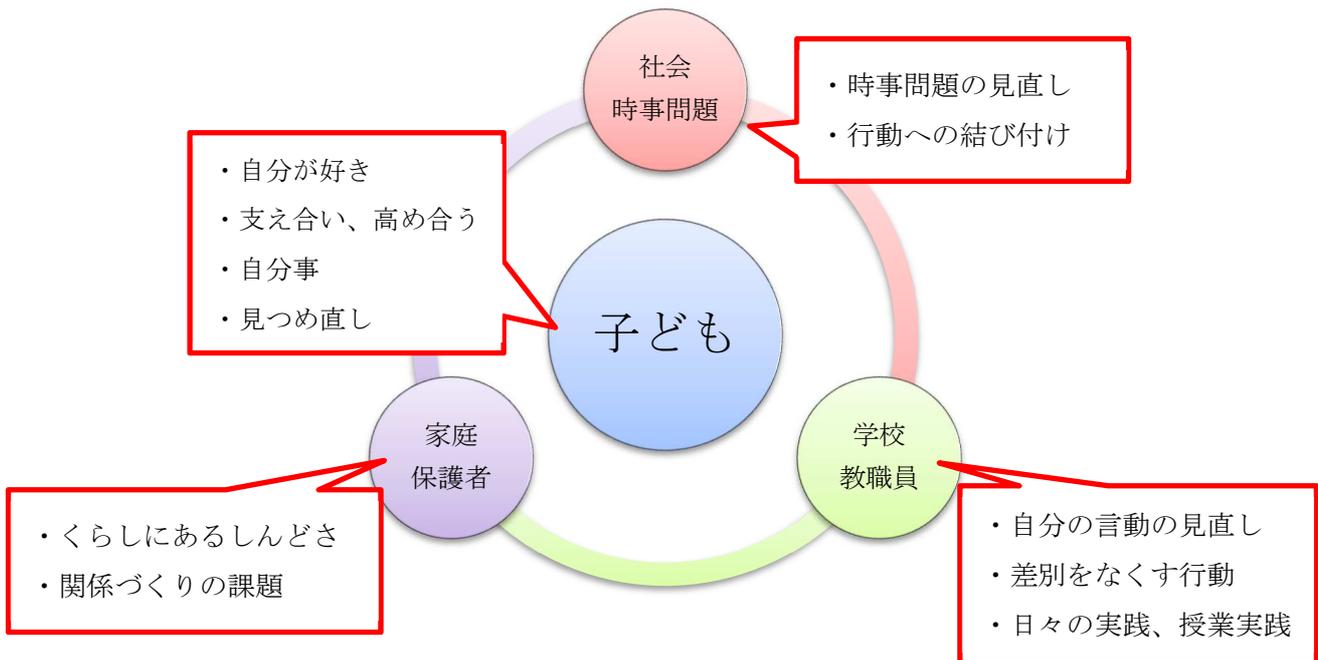
『6年生で部落問題学習ができる子どもたちの育成』



※「自分事」

- ・「もしも自分だったら…」から「自分はどうだったのか？」へ
- ・「なくなってほしいです」→「なくしていきたいと思います」→「なくしていきます」へ

3 人権教育の具体



4 行動計画

(1) 子どもの現状を把握し、すべての子どもの人権が大切にされる仲間づくりをめざします

- ・子どもの行動の背景にあるものを捉え、より多角的に学級集団づくりについて検証できるようにつとめるとともに、一人一人に適切な指導ができるよう指導者が情報を共有する。
- ・自己肯定感を育て、子どもたちが互いの違いや個性を受け入れ、人の痛みを自分の痛みとして共感し、不合理を指摘し合い共に高まっていくことができる学級集団づくりを進める。
- ・授業づくりの中で互いに尊重し合える仲間を育てる。そのために、一人一人の子どもが「自分が大切にされている」と実感できる授業づくりを進める。
- ・視点となる児童をもとに学級集団の様子を振り返ることによって、課題を探り、解決のための手立てを考えて実践する。
- ・総合的な学習の時間や生活科、道徳、特別活動などの時間において、自分たちの身近な偏見や差別意識について考え、自分たちの生活を見つめさせる。
- ・6年生で部落問題学習ができる子どもたちを育てる。
- ・外国にルーツのある児童等を把握し、仲間づくりや学級指導にいかす。

(2) 授業づくりモデルをもとに人権を通して学び、部落問題学習を推進します

【授業づくりモデル】

① 目の前の子どもたちの課題となる姿から出発し、どんな力をつけたいのか

- ・課題となる姿が、子どもの背景や人権課題とどう結びついているかを検証する
- ・子どもたちの課題となる姿が変容していく視点を持つ
- ・子どもたちが45分間学び続けられる課題を設定する（「ゆれ」や「気づき」がある課題）

② 何のために、何をするのか（≠知識を増やしていくこと）

- ・その教材で絶対にはずさないことは何かを持つ（学ばせたいことは何か）
- ・人権課題や教材について教師自身が学び直す（交流・点検し合う）
- ・各学年の行事との関連で見直す（行事で取り組むことの精選、整理、関連・価値付け）

③ 活動を中心に計画する

- ・人との出会いや体験⇒身近になる⇒忘れない、思い出す、新たにつながる
- ・活動したこと、行動したことはよく覚えている⇒行動した自分が好きになる
- ・集団として活動する⇒自分を出す場面が出てくる
- ・「もしかしたら目の前に当事者がいるかもしれない」ということを常に考える
- ・時事問題で価値観・見方をひっくり返す⇒学んだことを実践し、気づくチャンスにする
- ・地域とのつながりという視点でも考えていく（地域教材の発掘）

④ 6年生の部落問題学習を見据えた系統性を持つ

- ・外国人の人権に加え、学年の系統性や子どもの実態に応じた人権課題を設定し、部落差別をなくすことにどうつながるかという視点を持って学習を積み上げる
- ・教師自身が部落問題と向き合い、部落問題学習に学ぶ

⑤ 事実を大切に

- ・想像したことを根拠に進めるのではなく、子どもがつかんできた事実を根拠としていく（事実にこだわり、それを根拠にしようとする姿は、部落差別をなくす姿に通じる。事実ではないウソや根拠のない情報に流されることは、自分でも気づかないうちに差別に加担してしまっていることになりかねない）

⑥ 自分ごとにしていく（≠自分がその立場だったら＝自分はどうなのか）

- ・おかしいことに腹が立つ（反差別の立場に立とうとする）
- ・相手の思いや考えを聴く（聴き合う）自分の思いや考えを語る（語り合う）
- ・自分を見つめ直す（自分をその問題から遠いところに置いていた自分に気づく）
- ・自分の生活にもどしていく（自分のために差別をなくそうと行動する）

(3) **学力保障・学び合う力の育成を推進します**

- ・差別を見抜く力をつけるため、基礎的・基本的な知識・技能を明確にして、その定着を意識した授業づくりをする。
- ・「聴き合う関係」と「語り合う関係づくり」を大切にして、すべての子の学びを保障する。

(4) **地域の人々や保護者との連携を図ります**

- ・年間1回は人権学習（総合的な学習の時間・生活科・道徳 など）を公開することで保護者・地域の方々とともに人権学習を深める機会とする。

(5) **教職員どうしが学び合い、自身の価値観・考え方を深めていきます**

- ・教職員自身の人権意識や言動を見つめ直す。
- ・教職員どうしが語り合える関係を築き、人権感覚を高め合える集団をめざす。
- ・人権教育についての校内研修会や学習会を持ったり、各種の人権教育研修会に参加したりして、一人ひとりの人権意識を高める。

5 仲間づくりについて

仲間づくりを進めるということは、集団の中でしんどい思いをして過ごしている子ども、集団から最も遠い位置にいる子どもが、周りの子の変容により、安心して、いきいきと生活できるようにしていくということである。それは同時に、どの子にとっても過ごしやすく、安心できる集団にしていくことにもなる。子どもたちがおかしいことはおかしいと言ったり、自分を見つめ直したりすることで、人とのつながりをつくり、自身の生き方を豊かにすることにもなる。

子どもたちはくらしの中にさまざまなしんどさを抱えている。そこには少なからず差別の現実がある。仲間づくりを進めていく上では、そのしんどさの背景には何があるのか、子どもどうしの関係や家庭背景といった『子どもを取り巻く環境』について（教師が、子どもどうしが）聴くこと、語ることで明らかにしていくことが、まずは必要である。そのために、教師自身が自分の見方や取組について多様な視点から見つめ直したり、方向性を捉え直したりし続けていかなければならない。そして「この子」にどんな力をつけていきたいのかを明確にして、子どもと向き合い、子どもどうしをつなげていく。他にも、次に挙げる点を大切にする。

- なかまの問題を自分のこととして考える力を育てる。（自分はどうなのか）
- うわさや偏見などに惑わされない事実を見つめる力を育てる。
- 視点になる子に対する周りの子どもたちの見方を変える。
- 自己選択・自己決定できる関係づくりを行う。
- 教師どうしで話をし、自分の見方や価値観を問い直し続ける。
- 教師どうしで日頃から子どものことを話す。